ISSN 1349-385X

名古屋大学 大学文書資料室ニュース

NUA Nagoya University Archives

Nagoya University Archives News　第31号　2014. 3

目次 Contents

平成26年度から大学文書資料室が改組されます ―― 2
企画展「「氷壁」を越えて
　　―石岡繁雄の生涯とナイロンザイル事件―」を開催しました―― 4
『紀要』第21号、第22号を刊行しました ―― 6
ホームカミングデイで企画展をおこないました―― 7
資料室日誌（抄） ―― 8
名大史をつむぐ資料を本室に！ ―― 10

ナイロンザイル事件の発端となった転落事故で亡くなった若山五朗の遺体が身に付けていた
ナイロンザイル（左）とアイゼン（右）（いずれも市立大町山岳博物館所蔵）

○平成26年度から大学文書資料室が改組されます

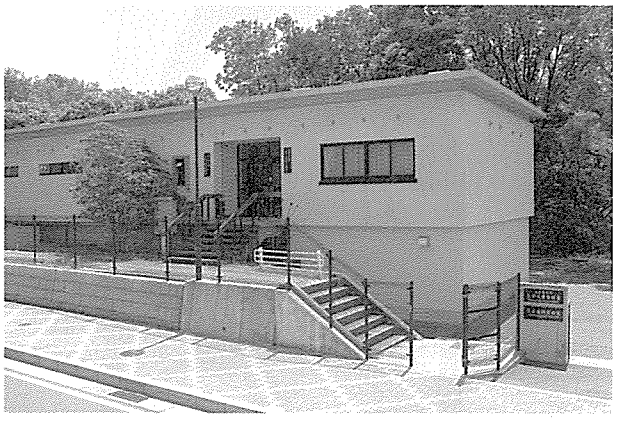
このたび、平成26年４月１日付で、大学文書資料室が改組されることになりました。

大学文書資料室は、『名古屋大学五十年史』の編纂が終わり、その任務を終えた名古屋大学史編集室を母体に、平成８（1996）年に名古屋大学史資料室として設置されました。その後、平成13年に大学史資料室に改組されましたが、大きな転換期になったのが、平成16年の大学文書資料室への改組でした。これによって、大学文書資料室（以下、本室）は、名古屋大学における保存期間が満了した法人文書の評価選別をおこない、歴史資料として重要なものを保存･公開する、国立大学法人名古屋大学（以下、本学）の公文書館として正式に位置づけられました。その後、平成23（2011）年の「公文書等の管理に関する法律」（公文書管理法）の施行にともない、「国立公文書館等」として内閣総理大臣の指定を受け、現在に至っています。

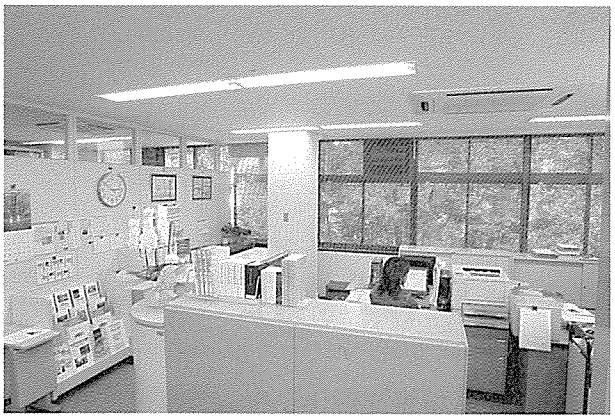
今回の改組により、変わった点は大きく２つあります。１つは、本室が学内共同教育研究施設（センター相当施設）から本部直属の運営支援組織になったことです。これにともなって、これまで兼任教授が務めていた室長に、本学理事の１人が就任することになりました。もう１つは、室内を歴史公文書部門（部門長は本部事務局総務部長）と歴史資料・大学史編纂部門（部門長は兼任教授）という２つの部門に分けたことです。前者が歴史公文書（歴史資料として重要な法人文書）に関する業務を、後者が歴史公文書以外の歴史資料（本学の歴史に関わる個人および団体の史料）に関する業務および本学の大学史編纂に向けての業務を担当することになりました。

この改組の背景には、公文書管理法の施行があります。本学は、我が国の基幹的総合大学であることふまえ、本室が国立公文書館に準ずる施設として指定を受け、本学の歴史公文書を保存・公開することになりました。今回の改組は、このための体制強化です。本部直属にして学内における位置づけを強化し、よりフレキシブルに行動できる組織になります。また、公文書管理法施行後３年間の経験を通じて、歴史公文書とそれ以外の歴史資料を分けて管理した方が、効率的かつ合理的に業務を進められることが分かりました。さらに将来の周年史編纂にむけての準備体制を強化する必要があり、室内を二部門に分けました。もっとも、二つの部門に分かれたと言っても、業務内容は基本的に変わりませんし、所在地や建物もこれまで通りです。

実務を担当する人員としては、これまでの常勤室員（特任助教）１名、パートタイム勤務職員（事務補佐員）６名に加えて、常勤室員（契約職員、本学事務職員 OB）１名が増員されます。

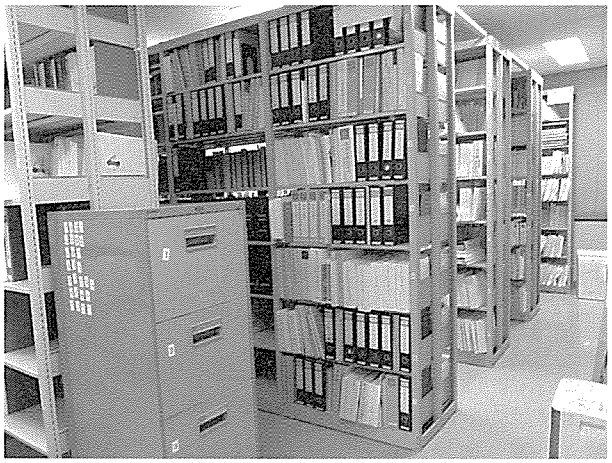


大学文書資料室（本部５号館）

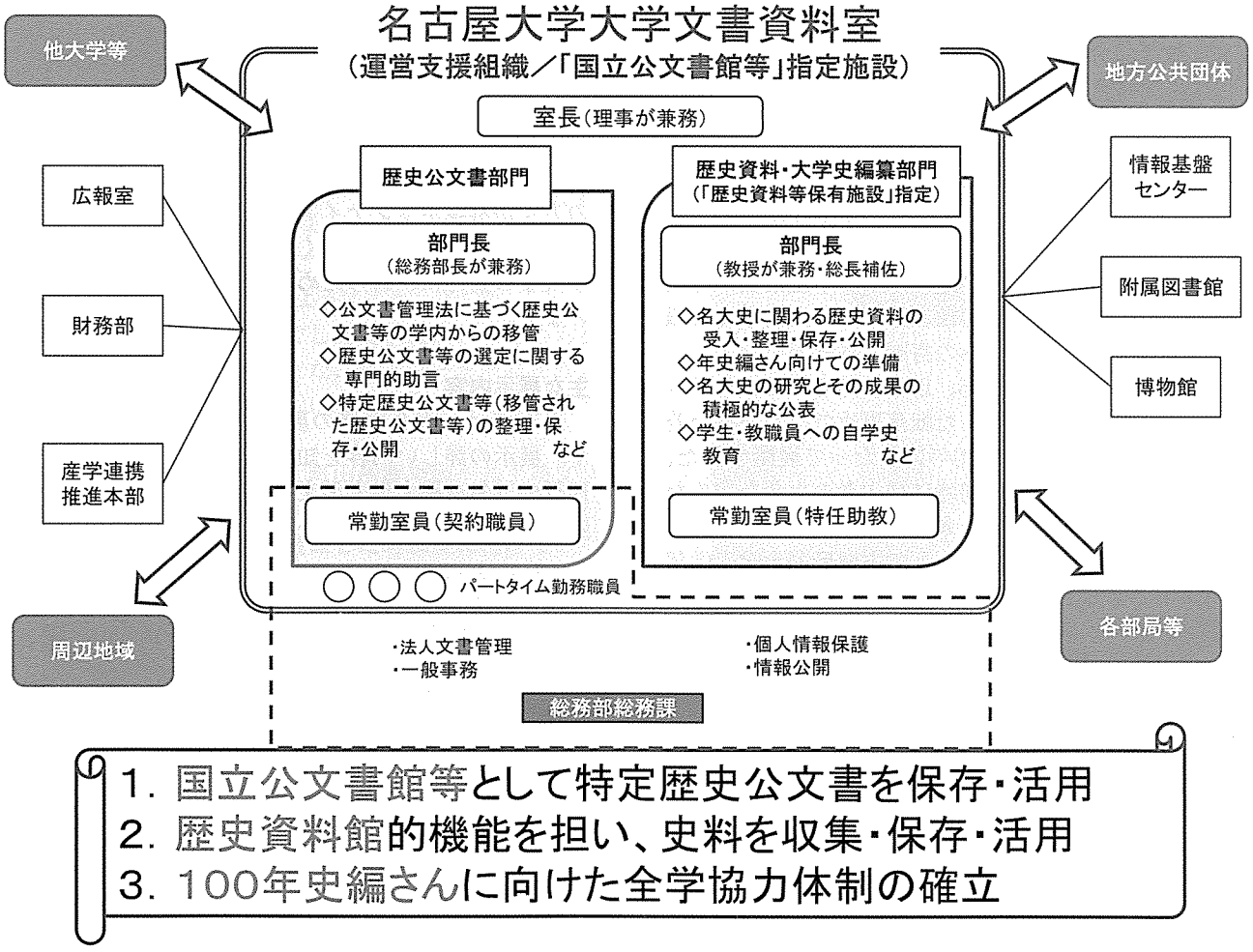


事務室・受付カウンター

資料閲覧コーナー



書庫の様子



改組後の大学文書資料室

企画展
「「氷壁」を越えて —ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯—」を開催しました

ナイロンザイル事件

このたび、平成25（2013）年11月５日から平成26年１月30日までを会期に、第28回名古屋大学博物館企画展として、「「氷壁」を越えて—ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯—」を開催しました。名古屋大学博物館（以下、博物館）と大学文書資料室（以下、本室）の共催によるものです。

ナイロンザイル事件とは、1955（昭和30）年１月に北アルプスの前穂高岳でおこった転落死亡事故に端を発し、その原因がナイロン製のザイル（ロープ）の弱点にあるか否かをめぐって争われた、当時の社会問題になった事件です。犠牲者の遺族や関係者が、メーカー、山岳界、学界、マスコミなどにねばり強くはたらきかけ、20年の歳月をへて、ようやくその主張が広く認められるに至るという結末をむかえました。井上靖の人気小説『氷壁』の素材にもなりました。

石岡繁雄

企画展「「氷壁」を越えて」（以下、本企画展）を開催するきっかけとなったのは、本ニュース前号でも報じた石岡繁雄資料の本学への寄贈・寄託でした。

石岡繁雄氏（1918－2006、以下敬称略）は、ナイロンザイル事件の発端となった転落事故で亡くなった若山五朗の実兄で、その後20年にわたって展開された、若山らの名誉を回復し、同時に登山者の生命を守るための運動の主役ともいえる人物です。また、第八高等学校（本学旧教養部の前身）と名古屋帝国大学工学部の卒業生であると同時に、11年余りにわたって名古屋大学（以下、本学）の事務官として勤務するなど、本学とも密接な関わりを持っています。この事件も、石岡の本学事務官時代に起こりました。

石岡資料の本学への寄託・寄贈と企画展の開催

石岡繁雄は、記録を残すことに対しても大変熱心な人物で、2006年に亡くなった後には膨大な個人資料が残されました。そしてその翌年から、石岡の次女である石岡あづみ氏と石岡の教え子の方々などの有志（のちに「石岡繁雄の志を伝える会」となる）が、この石岡繁雄資料の整理とスキャニング作業を始めました。その足かけ５年にわたる膨大な作業が終わった2012年になって、石岡資料のうち、文書資料約12,000点（「石岡繁雄文書資料」）が本室に寄託、石岡の遺品や発明品など物品資料約500点（「石岡繁雄コレクション」）が博物館に寄贈されました。そしてこれを記念して、本企画展が開催されることになったのです。

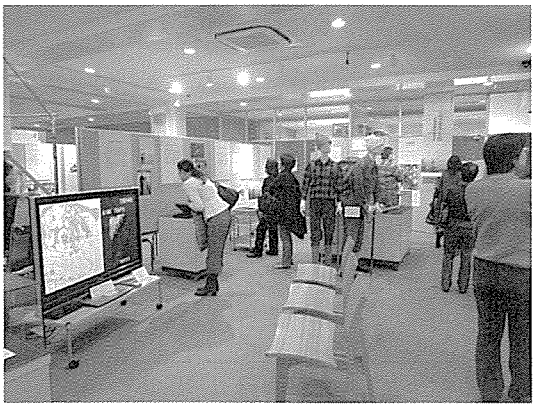
準備作業

展示の準備作業を本格的に始めたのは、平成25年度に入ってからです。博物館からは西田佐知子准教授（主に第１・第３コーナーを担当）、本室からは堀田慎一郎特任助教（主に第２コーナーを担当）と松下佐知子事務補佐員（主にハンズオン展示を担当）が集まり、この３人で話し合いながら準備を進めていきました。

また、石岡あづみ氏ら「石岡繁雄の志を伝える会」の方々には、展示内容のチェックや提案などのほか、展示会場の設営作業（会期終了後の撤収作業も）へのご参加など、ひとかたならぬご協力をいただきました。また展示期間中においては、石岡氏ら「伝える会」の方々が解説ボランティアとして、全ての開館日に原則２名ずつ会場へ詰めてくださいました。石岡氏らの多大なご協力に、あらためて感謝の意を表したいと思います。

主な展示内容

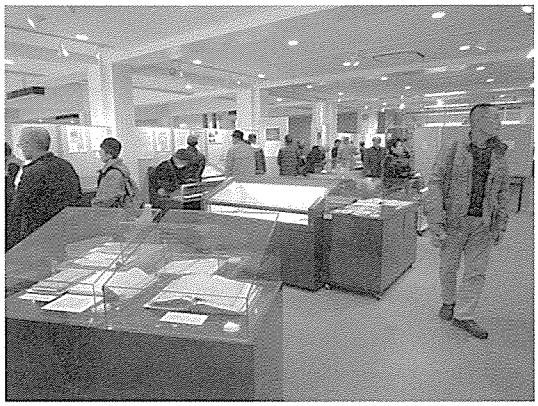
以下では、本企画展の展示内容の概略を紹介します。展示の詳しい内容を知りたい方は、平成26年３月刊行の『名古屋大学大学文書資料室紀要』第22号掲載の展示記録をご覧ください。



展示会場の様子（第１コーナー）

本企画展は、ナイロンザイル事件までの石岡繁雄を描く第１コーナー「バッカスと山—石岡繁雄の前半生

—」、ナイロンザイル事件を特集する第２コーナー「ナイロンザイル事件—石岡と岩稜会、20年の闘い—」、事件をのりこえた石岡の後半生を描く第３コーナー「「氷壁」を越えて—石岡がめざした安全学—」から構成されています。ナイロンザイル事件と石岡繁雄という個性が密接に結びついていることに注目し、それらを交互に重ねていくというねらいです。



展示会場の様子（第２コーナー）

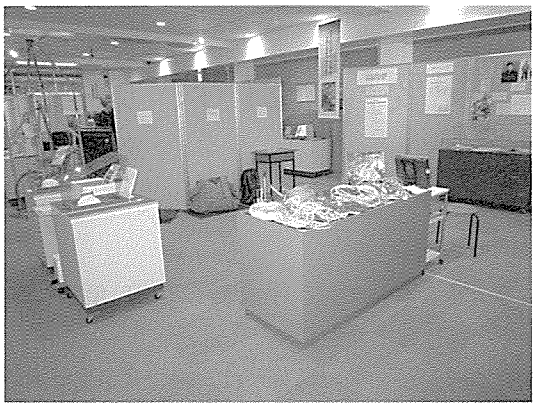
本企画展では、１枚200字程度、全部で34枚のストーリーパネルを設置しました。これは、ナイロンザイル事件は複雑な内容を持っており、写真パネルや展示物だけで全体像を説明することが難しいため、これを補うためのものです。そしてこのストーリーパネルのそれぞれに対応する写真や図表のパネルを配置していく方法をとりました。また、コーナーごとに略年表を配置して、さらに大まかな流れが分かるように工夫しました。

展示ケースに入れるなどした展示物は、もちろん石岡繁雄資料が中心です。ただ、第２コーナーはどうしても文書資料ばかりの展示になりがちなことが悩みでした。

これについては、市立大町山岳博物館や井上靖文学館から資料を借用して展示することで改善できました。とくに、若山五朗が遭難した時に身に付けていたナイロンザイルやアイゼン（本ニュースの表紙を参照）、遭難場所に残っていたナイロンザイルの切片などを、偶然にも改修工事で休館中ということで、大町山岳博物館から借用することができたことは大変幸運でした。そのほか、事件の核心部分である、岩角の鋭さによるザイルの強度差を体感できるアトラクションや、事件当時と現在の登山の違いを実感できる企画など、ハンズオン展示を充実させました。

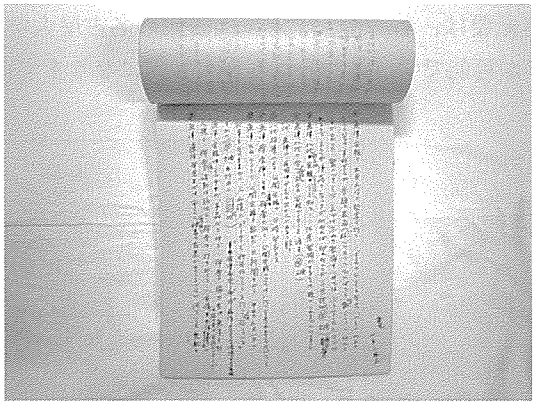
企画展の結果と反響

本企画展の開催にあたっては、主要新聞が企画展の開催を大きく報じたほか、テレビやラジオでも、本企画展をきっかけにナイロンザイル事件や石岡繁雄の生涯が特集されました。石岡資料の受贈・受託の際も、マスコミの反応の大きさに驚きましたが、それ以上の反響であったといえます。



ハンズオン展示エリア（第２コーナー）

また本企画展では、会期中に三回の特別講演会を開催しましたが、そのいずれもが会場の講義室が満杯になる盛況ぶりでした。とくに、若山五朗のザイルパートナーとしてその転落を目の前に見たのち、石岡繁雄とともに事件に臨んだ石原國利氏による講演会では、会場に聴講希望者が入りきれなくなり、やむなく場外にスピーカーを置いて音だけでも聴いていただくという状況になるほどでした。このほか、展示会場でおこなったギャラリートークにも、非常にたくさんの方々に来ていただきました。



『氷壁』を朝日新聞に連載中の井上靖に対し、実際の事件に近いストーリーを提案した石岡繁雄による書簡の草稿。多くのマスコミの関心を集めた。

そして本企画展は、約３ヵ月の会期中に５,420人の入館者を集めて幕を閉じました。一般には有名とはいえない人物の個人資料の展示会としては、この入館者数は異例の多さだと思われます。本企画展の開催によって、山岳史においてだけではなく、消費者の安全という観点からも歴史的に重要であるナイロンザイル事件を広く社会に紹介することができ、さらにその事件で活躍した人物を本学が輩出し、事件当時においても本学関係者がその人物を支えたことをアピールできたことは大きな成果であったと思います。

資料室だより①

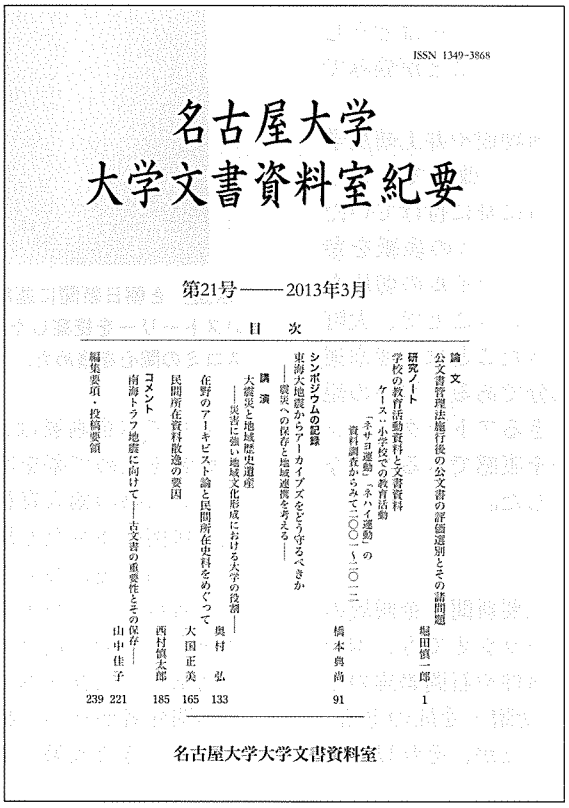
○『紀要』第21号、第22号を刊行しました

大学文書資料室では、平成25（2013）年３月に『名古屋大学大学文書資料室紀要』第21号を、平成26年３月に第22号を刊行しました。

第21号（表紙を下に掲載）は、公文書管理法の施行によって、我が国の行政文書および法人文書の評価選別（歴史的に重要な文書の選定）がどのように変わり、その結果どのような問題点が生じているのかを論じた堀田慎一郎「公文書管理法施行後の公文書の評価選別とその諸問題」、1960年代および2000年以降の教育活動を素材に、学校教育におけるアーカイブズの問題を論じた橋本典尚「学校教育活動と文書資料　ケース：小学校での教育活動「ネサヨ運動」「ネハイ運動」の資料調査からみて2001～2012」、平成25年２月に大学文書資料室が開催したシンポジウム「東海大地震からアーカイブズをどう守るべきか―震災への保存と地域連携を考える―」における講演およびコメントの内容を活字化した記録、からなっています。

第22号は、大学文書資料室が平成25年11月から平成26年１月にかけて博物館と主催した企画展「「氷壁」を越えて―ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯―」（本ニュース４～５頁参照）の詳細な展示記録、名大史における大事件の１つであるいわゆる「医学部紛争」から医学部を正常化させることに学部長などとして尽力した加藤延夫名誉教授（元名古屋大学総長）による回顧録「名古屋大学医学部紛争正常化への道程」、前述のシンポジウムの討論の模様を活字化した記録、からなっています。

本紀要は、名古屋大学附属図書館の名古屋大学学術機関リポジトリで閲覧およびＰＤＦファイルでのダウンロードが可能です（第22号はもう少し先になります）。


ISSN 1349-3868

名古屋大学
大学文書資料室紀要

第21号――2013年3月

目　次

論文
公文書管理法施行後の公文書の評価選別とその諸問題　堀田慎一郎　1
研究ノート
学校の教育活動資料と文書資料
ケース：小学校での教育活動「ネサヨ運動」「ネハイ運動」の資料調査からみて二〇〇一～二〇一二　橋本典尚　91
シンポジウムの記録
東海大地震からアーカイブズをどう守るべきか
――震災への保存と地域連携を考える――
講演
大震災と地域史遺産
――災害に強い地域文化形成における大学の役割――　奥村　弘　133
在野のアーキビスト論と民間所在史料をめぐって　大国正美　165
民間所在資料散逸の要因　西村慎太郎　185
コメント
南海トラフ地震に向けて――古文書の重要性とその保存――　山中佳子　221
編集要項・投稿要領　239

名古屋大学大学文書資料室

資料室だより②

○ホームカミングデイで企画展をおこないました

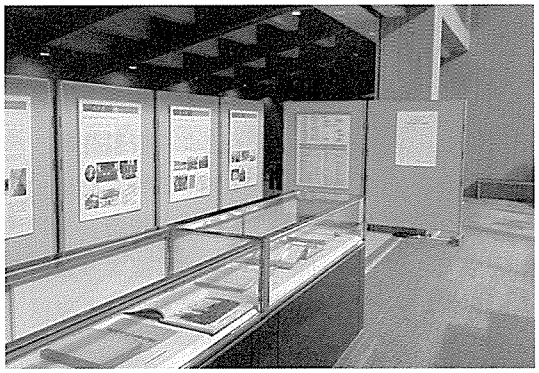
大学文書資料室は、平成25(2013)年10月19日(土)に開催された第9回名古屋大学ホームカミングデイにおいて、企画展「名古屋大学　学部の誕生と草創期」と、「「氷壁」を越えて―ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯―」プレ展示をおこないました。場所は、メイン会場である豊田講堂のホアイエです。

「学部の誕生と草創期」は、名古屋大学に設置されている9つの学部の創設とその後の草創期の歴史を、パネル等で展示したものです。名古屋大学は、1996～2000年にかけてのいわゆる大学院重点化によって、大学院を中心とする組織に再編成されて現在に至っています。しかし、学生の多くを占めるのはやはり学部生ですし、学部の4年間が大学教育の礎となっていることは今も変わっていないと思います。

パネルは、広報誌『名大トピックス』で大学文書資料室が連載している、「ちょっと名大史」コーナーのページを拡大したものです。この1年半ほどの間に、「学部の誕生と草創期」シリーズとして、各学部1回ずつとして発表してきた9回分と、そのほかの関係する回を合わせて、12枚の展示パネルとしました。また、大学文書資料室が所蔵している、学部の設置と草創期に関する資料数点を、ケースに入れて展示しました。

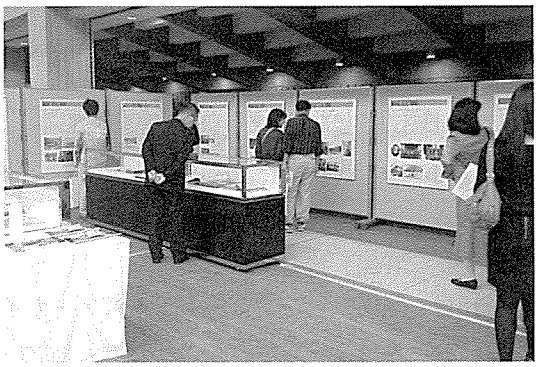
「「氷壁」を越えて」プレ展示は、ホームカミングデイの半月後から始まる企画展の宣伝をかねて、企画展の内容の中でも名古屋大学に直接関わる資料をケース展示しました。

当日は、400人近くの観覧者がありました。どの学部についても展示物が必ずあるため、幅広い方々に関心を持っていただけたようです。



企画展「学部の誕生と草創期」

「「氷壁」を越えて―ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯―」プレ展示



展示を観覧する人々

資料室日誌（抄）　平成25（2013）年2月～26（2014）年1月

2月7日　シンポジウム「東海大地震からアーカイブズをどう守るべきか―震災への保存と地域連携を考える―」を開催。

2月8日　東京外国語大学事務職員2名が資料室を視察。
堀田慎一郎室員が文書管理プロジェクト会議に出席（5／17も同様）。

2月19日　室会議（池内敏室長・加藤史征（4月から井田幹恵）総務課企画調整掛長・堀田室員・松下佐知子事務補佐員、以後ほぼ隔週で開催）。

2月21日　太陽地球環境研究所東山分室より宇宙線研究室資料を受贈。

2月28日　国立国会図書館憲政資料室から2名来室、加藤鐐五郎資料を調査。

3月22日　『名古屋大学の歴史年表』PDF版を全教職員に配付。

3月25日　資料室運営委員会（第28回）を開催。

3月27日　ホームカミングデイ実行委員会に出席（5/24、6/21、9/19、11/8も同様）。

3月31日　『名古屋大学大学文書資料室紀要』第21号、『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第30号を刊行。

4月2日　堀田室員が新規採用職員研修で名古屋大学の歴史について講義。

4月11日　企画展「「氷壁」を越えて―ナイロンザイル事件と石岡繁雄の生涯―」について打ち合わせ（5／8、5／28、7／3、7／9、7／10、8／6、9／26、9／27、10／16、10／23も同様）。

4月16日　全学教育科目（前期）「名大の歴史をたどる」講義開始。
水谷伸治郎名誉教授より、名大地球科学史資料を受贈（6月13日、7月16日に追加受贈）。

4月22日　附属図書館情報システム課より資料を受贈。

4月23日　池内室長が鮎京正訓理事・副総長と将来構想について面談。

4月30日　医学部・医学系研究科総務課より法人文書移管、資料受贈。

5月7日　堀田室員が教育学部附属学校の法人文書を調査。

5月8日　堀田室員が教育学部附属学校で資料を調査し、山田副校長と打ち合わせ。
工学研究科瓜谷章教授より瓜谷郁三名誉教授旧蔵資料を受贈。

5月16日　東京大学史史料室の森本祥子特任准教授が来室し、視察およびヒアリングを実施。

5月28日　資料室改組に関するヒアリング（堀内敦総務部長・澤田利夫総務課長・河口正樹総務課課長補佐・池内室長・堀田室員・井田掛長・松下事務補佐員）。

5月29日　資料室運営委員会（第29回）を開催。

6月7日　医学部附属看護学校同窓会花木玲子氏ほか2名が来室し、同会資料を寄贈。

6月10日　堀田室員が、国立公文書館等連絡協議会準備会合および全国公文書館実務担当者意見交換会に出席（福岡）。

6月11日　全学教育科目「名大の歴史をたどる」において濵口道成総長が講義。
池内室長が全国公文書館長会議および関連行事に出席（福岡）。

6月12日　資料室運営委員会将来構想専門委員会（第5回）開催。

6月13日　教育学部附属学校より法人文書移管。

6月24日　教育学部附属学校より資料受贈。

6月25日　内閣府に「平成24年度特定歴史公文書等の保存および利用の状況報告」を提出。

6月26日　教育学部附属学校図書室より資料受贈。

6月28日　財務部財務課決算グループより法人文書移管。

7月5日　大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センター情報資料室より資料受領（7／11も同様）。

7月8日　大学文書資料室改組について協議（鮎京理事・堀内総務部長・池内室長）。
農学部・農学研究科庶務掛より法人文書移管。

7月16日　資料室運営委員会将来構想専門委員会（第6回）持ち回り審議。

7月18日　堀田室員が名古屋タイムズアーカイブス委員会で資料調査。

7月31日　「平成24年度に作成印刷された印刷物の提

供について（依頼）」を事務局、運営支援組織、各部局へ発送。
8月2日　学務部入試課より法人文書移管。
8月5日　学務部学生支援課より法人文書移管。
8月8日　資料室運営委員会（第30回）を開催。
8月10日　ソウル大学校附属図書館司書が資料室を視察。
8月14日　企画展「「氷壁」を越えて」チラシを関係機関に発送。
8月15～16日　全学一斉夏季休暇にともない閉室。
8月20日　資料室改組について打ち合わせ（鮎京理事・池内室長・井田掛長）。
8月27日　文系事務部より法人文書移管。
8月28日　総務部人事課、職員課より法人文書移管。
8月30日　総合企画室より法人文書移管。
9月2日　池内室長が役員懇談会にて資料室の新組織案を説明。
9月3日　池内室長が部局長懇談会にて資料室の新組織案を説明。
9月10日　「法人文書保存期間・移管等に関する基準（素案）」修正案を各課等の文書管理担当者に提示。
研究所事務部（エコトピア科学研究所）、附属図書館情報システム課より法人文書移管。
9月11日　附属図書館より資料を受領。
9月12日　医学部・医学系研究科総務課より法人文書移管。
9月20日　堀田室員が総務部総務課の法人文書を調査。
9月27日　特定歴史公文書の燻蒸（～10月3日）。
9月29日　堀田室員が、東北大学史料館50周年記念講演会に出席。
9月30日　堀田室員が東北大学史料館を視察。
10月7日　全学教育科目（後期）「アーカイブズ入門－文書史料の世界をあるく－」講義開始。
10月19日　ホームカミングデイにて企画展「名古屋大学　学部の誕生と草創期」と企画展「「氷壁」を越えて」プレ展示を開催。
10月30日　内閣府へ歴史資料等保有施設の新規指定申請書類を提出。
10月31日　松下事務補佐員が井上靖文学館を訪問し、企画展用の展示品の貸出を受ける。
11月1日　資料室特任助教の公募を告示。
11月5日　博物館第28回企画展「「氷壁」を越えて」開始（～翌年1月30日）。
11月7日　堀田室員と山田裕輝事務補佐員が市立大町山岳博物館を訪問し、企画展用の展示品の貸出を受ける。
11月8日　和歌山大学の橋本唯子特任准教授が来室し、資料室の視察およびヒアリングを実施。
『名古屋大学大学文書資料室紀要』第22号の原稿募集を告示。
11月14日　ＮＨＫ「ほっとイブニング」で企画展「「氷壁を越えて」が特集される。
11月18日　企画展ギャラリートークで堀田室員が解説。
11月22日　企画展特別講演会（石原國利氏）を開催。
11月26日　京都大学大学文書館を視察（鮎京理事、吉川卓治教授、澤田課長、堀田室員、井田掛長）。
12月12日　附属図書館情報サービス課より資料移管。
12月13日　企画展特別講演会（相田武男氏）を開催。
12月19日　資料室事務補佐員（パートタイム勤務職員）の公募を告示。
1月6日　学務部学務企画課を通じ、名古屋大学体育会所属部および名古屋大学文化サークル連盟所属サークルに資料保存状況アンケートを実施。
1月16日　法人文書ファイル管理簿更新説明会で堀田室員が説明。
1月17日　企画展特別講演会（三矢保永氏）を開催。
1月18日　松下事務補佐員が井上靖文学館を訪問し、企画展で展示した大町山岳博物館からの借用資料を井上靖文学館企画展示のため届ける。

名古屋大学の卒業生、現役・退職後の教職員の方々へ

名大史をつむぐ資料を本室に！

その他、ご処分予定の資料についても、まずはご一報ください

◎在学時の配布物
（学生便覧、シラバス、試験問題、課外活動の資料…）
◎教育・研究活動、大学・部局運営に関する資料
（各種書類、会議のメモ、備忘録、スクラップ記事…）
◎校費による印刷物・刊行物
（冊子、パンフレット、ポスター…）
◎ご退職関係の記念冊子・記念論集・業績集…
など

※ご寄贈資料は、名古屋大学大学文書資料室規程等にもとづき、大切に保存・管理・活用させていただきます。とりわけ資料の公開につきましては、寄贈者の意向を最優先しつつ、深甚の配慮をいたします。

【連絡先】 名古屋大学大学文書資料室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 789-2046
FAX 788-6222
Mail nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp

名古屋大学大学文書資料室ニュース 第31号
Nagoya University Archives News No. 31

名古屋大学大学文書資料室
室　長　池内　敏（教授・併任）
室　員　堀田　慎一郎（特任助教・専任）
掛　長　井田　幹恵
事務員　増田　よしみ
伊藤　由美
松下　佐知子

発行日　2014年3月31日
編集
発行　名古屋大学大学文書資料室
名古屋市千種区不老町〒464-8601
電話：(052) 789-2046
FAX：(052) 788-6222
E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
印刷　株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田2-16-38